

## 哀悼 前川晶君

戸倉英美

中文研究室の卒業生である前川晶君が、二〇〇五年六月二六日に亡くなりました。三十三歳の若さでした。

前川君は、一九九一年、神戸の灘高校から東京大学教養学部文科I類に入学、九三年法学部へ進学し、九六年同学部を卒業後、学士入学を経ることなく中文の修士課程に入学しました。九八年には博士課程に進学しましたが、二〇〇一年突然大学院を中退し、四国に本社のある会社に、コンピューターのプログラマーとして勤務することになりました。

まず退学の事情と合わせ、前川君が中文の学生となるまでの経緯をお話したいと思います。中文を離れるきっかけとなったのは、前年の秋、本郷キャンパスで聞かれた日本中国学会の大会でした。その年の大会は例年とは異なり、時代毎にいくつかのセッションに分かれて開催され、前川君はそのうちの宋元セッションで「朱熹『詩集伝』をめぐる環境について」と題して発表を行いました。大会プログラムに掲載された要旨には、『詩集伝』は「中国哲学」「中国文学」という学術分野の境界に位置しており、その双方から敬遠されている、『詩集伝』をめぐるこのような状況を題材に、宋元研究の枠組について考察したい、という大意が述べられています。私は別の会場で唐代セッションの司会を担当していたため、前川君の発表を聞いていません。宋元セッションの座長を務めた木村英樹先生によれば、前川君は原稿も用意せず発表を始め、話脈絡がないばかりか、その態度も学会発表の際の通例を著しく逸脱したものだだったとの

ことです。参加者からは厳しい批判が巻き起こり、前川君はその批判に応えることが出来ず、会場は一時騒然となりました。当時会場にいた学生の「怖かった」というひとことから、その雰囲気伝わってきます。学会が終了した少し後、私は宋元セクションの司会と、前川君の発表に対しコメントーターを担当された先生、それに会場から厳しい発言をされたというK先生の三名に、次のようなお手紙を送りました。

K 先生

拝啓

突然お手紙差し上げる失礼の段、お許し下さい。私は東京大学中国文学科で前川晶君の指導教官を務めております戸倉と申します。先日本学で開かれました日本中国学会の大会では、前川君の発表の内容の空疎さと不適切な発表態度のため、先生から厳しいお叱りを頂戴したと聞いております。私の指導がいたらなかったため、極めて未熟な発表をお聞かせし、ご不快を与えましたことを、衷心よりお詫び申し上げます。前川君の発表が研究の名に値しないものであったことは、弁解の余地がございませんが、同君の経歴と今回の発表にいたった経緯をひとことご説明致したく、思い切った筆を執りました。

前川君は東京大学法学部を卒業した後、直接中文の大学院へ進学してきた学生です。大学に入学した当初より、当時は教養学部の教員をしておりました私の授業に出席し、中国の古典に対する該博な知識と抜群の読解力で、異彩を放ちました。前川君自身の言葉によれば、中学生の頃より様々な漢籍を読みふけり、『明実録』をも読破したとのことでした。私が文学部中文科へ移った後も、前川君は熱心に授業に出席し、中文の学生たちとも親しくなりました。中国の古典を研究するための基礎的学力の点で、前川君が中文の大学院生にも劣らぬものを持っていることは明らかでした。しかし私は前川君に中文へこないかと誘ったことはありませんでした。研究者として成長するためには、前川君自身が自覚を

持つて補つてもらわねばならないものが、たくさんあると思つたからです。

法学部の四年生となつた夏、前川君は折り入つて相談があるといい、面会を求めました。就職のための会社訪問を始めたところ、大学に残つて勉強したい気持ちが強くなつた、中文の大学院に進学したいが許してもらえるだろうかというのです。私は承諾しましたが、中文の大学院に入学するには、現代中国語の力を十分つけておくことが必要であると告げました。それまで前川君は現代中国語を学習したことはなく、翌年の試験は不合格でしたが、さらに一年勉強した結果、現代語にもよい成績を取つて合格しました。そして二年後には修士論文を仕上げ、博士課程に進学しました。卒業論文のテーマは、朱子の詩集伝について、修士論文は朱子を中心に屈原に対する評価の変遷をたどつたものでした。不十分な点は多々あるものの、文献の読解を基礎に考察を進めるといふ点では、研究の基本線に乗つてゐること、テーマを設定する視点や、論理の展開に独自のものが見られることが合格の理由でした。

しかし博士課程進学後、前川君は期待に反し順調な成長を遂げてはくれませんでした。現代中国語を読むことはできても会話はほとんどできないため、中国留学を強く勧めましたが従いませんでした。中文研究室の紀要に応募してきた論文は、着想には見るべき点があるものの、随想風の書き方で、自分の言葉に確証を得るための努力が不足しています。自分の考えが正しいか否かは文献を慎重に読んで検討しなければならぬこと、先行研究には敬意を持つて接し、その成果を学ばなければならぬことなど、研究の基本に立ち返つて指導し、書き直しを求めました。二度三度と書き直しても掲載可能なレベルに達せず、指導を続けていた時、突然前川君から手紙が届きました。感情的な言葉で、論文の取り下げを告げるものでした。

それ以来私のことが煙たくなつたのか、前川君は授業にもほとんど顔を見せなくなり、研究のことで相談に来ることもなくなりました。今回の発表についても事前にも何の話もなく、発表の選考に加わつていなかった私は、セクションごとに決定したリストを見て初めて前川君が応募していたことを知りました。その後も同君からは、何も連絡はありません

んでした。同僚は、指導教官に相談もしないような学生に発表をさせるべきではなかった、どこかの時点で中止させるべきだったという意見です。私もそのことは何度か考えました。しかしそうしなかったのは、この発表が前川君にとつてひとつの転機になってくれればと考えたからでした。私はこれまで前川君の特異な才能を大きく伸ばしたいと願いながら、指導に失敗してきました。前川君はもうこのまま大学を去るほかないかもしれない、しかしそれではあの才が借しいと悩んでいた矢先、思いがけず前川君が自ら進んで発表をするというのです。前川君の発表は多かれ少なかれ批判を浴びるでしょう。しかしそれが薬になり、何かを掴んでくれるなら、発表を中止させるよりも本人のためになるのではないか。考えた末に、結局今回は放任のままやらせるという方針を決め、前川君に対しては、制限時間を守り、コメントーターや会場の方々の発言の機会を奪わないこと、司会と座長の指示に従いくれぐれも失礼のないよう気をつけることを留守電を通して注意したのみで、発表の当日を迎えました。

座長を務めた木村英樹さんによれば、前川君の発表は私の予想した以上に出来の悪いものだったようです。その翌日、前川君から、一通のはがきが届きました。今回の発表の件では、長らく恩顧を受けた東大中文の先生方に申し訳ないことをしたと詫び、思うところがあり、今年度いっぱい以学生をやめ、就職する予定であるとありました。私の試みは、多くの方々にご迷惑をおかけしたばかりでなく、本人のためという点でも配慮を欠いたものだったかと深く反省しております。しかし私は前川君が今回の経験をバネとして、何とかもう一度研究に取り組んでくれることを願っています。相談にくるよう留守電にメッセージを残し、連絡を待っている状態です。

以上長々と書き連ねてまいりましたが、申し上げたいのは、前川君ははなはだ未熟で欠点の多い学生ではありませんが、優れた才能に恵まれ、中国古典の研究に貢献できる可能性も皆無ではないということです。今回の発表は私の指導力不足のため、惨澹たる結果に終わりましたが、もしも同君が今後も中国研究の周辺で生き続けることになりましたならば、何卒広いお心をもってご指導賜りますようお願い申し上げます。身勝手なことばかり書き連ねました。ど

うか意のある所をお汲み取り下さいませ。

敬具

二〇〇〇年十月十五日

戸倉英美

幸い三人の先生からはお叱りもなく、前川君に対し暖かい配慮に充ちたお言葉を頂きました。特にK先生のお便りには、前川君を見ていると学生時代の友人の一人を思い出すとあり、常識はずれの発表をも、若さゆえの逸脱と寛容に受け止めてくださったことを、心からありがたく思いました。

しかしこのようにお手紙をお送りしたことは、前川君には告げませんでした。この件については、私にも責任があると考え、お詫びの手紙を出しましたが、前川君からすれば、自分の不始末を教員に謝って貰ったようで、よい気持ちはしないでしょう。前川君に強く反省を求めながらも、私は翻意を促すべく説得を続けました。東大中文の先生方に申し訳ないという気持ちがあるならば、研究を継続し、成果を挙げることで償うべきであると。しかし前川君の決意は固く、退学の理由として、来年は奨学金が切れるため、就職しなければやっていると述べたのみでした。それなら大学を離れる前に、長年の恩顧に感謝する意味で、論文を一つ仕上げるようにと要求し、短い時間で書き上げたのが、中文研究室紀要第4号掲載「塩谷温と『支那文学概論講話』について」です。これはこの書の中国文学研究史上における位置づけと、時代背景の中で持つ意味とを考察したもので、主題は前川君自身が選び、藤井省三先生のご指導のもと、大きな書き換えを要することなく完成しました。この論文は、前川君が多方面にわたる広汎な知識と、独自の視点ばかりでなく、その視点をもとに論文を組み立てる能力をも備えていることを物語っています。私の指導に反発して放棄した論文「六朝文学的構造の問題」に比べればうってかわって落ち着いた出来で、学会発表の経験がよい薬になったことは間違いありません。しかし、この薬は私が考えていた以上に、効き過ぎたという面があったようです。

その後は一年に一度か二度ずつ、前川君から連絡があり、会って話をしました。出張で東京に出てきたので、もしもお時間があれば、というようなメールがひよつこり届くのです。ただこの時もこちらから、また勉強しなさいとは言いません。半分は仕事の愚痴を聞き、あと半分は古今東西、諸々の話題をめぐって雑談するだけでしたが、私を必要としてくれるならそれでよいと思ってきました。

こうして時々会っている間、学会発表のことは殆ど話題になりませんでした。何年か後、何かのきっかけで、前川君がああときは2チャンネルにいろいろ書き込まれたと口にしました。2チャンネルとはインターネット上のサイトで、匿名であるのをよいことに、時には悪意に満ちた中傷や、個人攻撃が書き込まれることもあるようです。東大生のくせに学会で恥をかけたという嘲笑、あるいは東大の顔に泥を塗るようなまねをしたという非難を、前川君は自分へ向けられたものと受け止めました。

このとき私は、初めて三人の先生方にお詫びの手紙を出したことを告げ、先生方の返信にも言及しました。K先生は前川君を激しく叱責しましたが、決して前川君の発言を全面的に排撃し、研究者としての資格はないと断罪したわけはありません。むしろ同じ道に志す、若い未熟なものへの眼差しをすぐにも取り戻してくださいました。そのご厚意に応えるには、匿名の非難に負けて中国文学から逃げてはいけません、前川君は何も言いませんでしたが、少しでもそんな気持ちになってくれたのなら、嬉しいと思います。

今年の六月、私は神戸に前川君の実家を訪ね、初めてご両親とお目にかかりました。ご両親によれば、前川君と中国古典との出会いは、小学校高学年の頃に遡ることです。とはいえご家族に、中国古典と縁のある方があったわけはありません。きっかけは、お父様がたまたま全巻揃えていた平凡社の中国古典文学大系でした。いつのまにか見つけ出し（最初は『三国志演義』だったそうです）、小学校の行き帰りに道歩きながら読んでいたため、二宮金次郎と

いう渾名を付けられるほど夢中になりました。やがて翻訳では飽き足らなくなり、自宅周辺の図書館を手始めに、漢籍を捜しては読みふける日々が始まりました。『明実録』全巻読破という「偉業」も、偶然この書をどこかの図書館で見つけたことが、きっかけだったようです。

ご両親はこんな前川君を見て、大学は当然文学関係の学科へ進むものと考えていたそうです。京大の文学部へ行ったかどうか勧めましたが、前川君はご両親の意に反し、東大法学部への道を選びました。高校を卒業した年は、東大文Iを受験し、受験の途中でいやになり、白紙答案を出して一浪しました。ご両親はこのことを何年か後に初めて知り、驚かれたそうです。ところが二年目も結局東大文Iを受験し、合格しました。この選択には、高校時代の恩師の影響が強く働いているというのがお父様のご意見です。しかしそれにしても、前川君は何を考え法学部に進学したのでしょうか。また学会発表の一件があるとはいえ、何故あっさりと中文を離れ、一度は背を向けたはずの世界に戻ってしまったのでしょうか。ご両親と話しながら、私はその原因の一つに、何でも容易くできてしまう前川君の能力の高さがあるのではないかと思いました。最初に中文の大学院を受験した年、前川君は不合格でした。漢文訓読は出来ても、それまで現代中国語を勉強したことがなかったからです。文学部には中国語中級の授業もあるので、それに出席したらと勧めると、「ええ、まあ、自分で何とかします」という答えです。そして実際自力で現代中国語を学習し、二年目にはよい成績で合格しました。

生活を支えていたプログラミングの技術も、学校で学んだものではありません。いつのまにか独学で身につけていたもののだそうです。もう一つご実家を訪問して知ったのは、前川君は絵を描くのが得意だったということです。高校の卒業文集に載せた作文には、きれいなイラスト（多くは少女漫画に出てくるような素敵な男性、あるいは性別不明の美しい人たち）が添えられています。転職を考えていたとき、あるアニメのプロダクションに、『銀河鉄道999』のイラストを送ったところ、是非来てほしいと懇請されたというお話も聞きました。前川君は真剣に入社を考えましたが、結

局この業界は、三十歳を過ぎて始めるのは厳しいと判断し、止めたそうです。

何事も興味に任せて集中してやれば、プロ並みの腕になってしまふ、その恵まれた能力を使いこなすには、人並み以上に長い時間が必要だったのかも知れません。

しかし多様な世界で活躍しながらも、前川君は中国の古典から完全に離れたわけではありませんでした。転職して東京に戻っていた二〇〇四年の夏は、奥多摩で催したゼミ合宿にも、一日だけ参加してくれました。その年の十二月に会った時は、パソコンがクラッシュして、以前書いたものがみな消えてしまったと言い、年末には中文研究室を訪れ、大学に提出した卒論と修論をコピーしていただきました。前川君は最後まで日本中国学会の会員でもありました。学友には、会費の請求がある度にどうしようかと思うのだけれど、一度退会するとまた入るのが難しいので、と話していたそうです。

メールの受信記録を見ると、十二月の次に連絡があったのは二〇〇五年四月二十九日です。この時は私が北京へ出張していたため会うことができず、五月二十一日、駒場でカヤグムの演奏会が開かれたのを機に、私から誘いました。卒論や修論を読み返すと、至らぬ点が多くて恥ずかしくなると言い、今考えているものがあるので、書き上げたら持ってきますとのことでした。ようやくここまで来てくれたかと、私は心から嬉しく思いました。前川君が駒場の学生だった頃、授業で『聊齋志異』を読みましたが、そのとき提出したレポートをもとに、想を新に書き直してみたいというのです。出発点に戻って、自分のやりたいことを見直そうという話を、他ならぬ駒場キャンパスの緑の下で聞いたこと、しかしそれが最後になってしまったことに、私は前川君との不思議な縁を感じ、深い悲しみを感じずにはいられません。

その時の求めに応じて、数日後、拙論のコピーを送りました。六月十三日に返事が来ています。

一言倉先生 侍史

前川です。先日は論文ありがとうございました。



雑事に取り紛れ、御礼が遅くなりまして申し訳ありません。

ご身辺、相変わらずご多忙でしょうか。

また近々よろしく願ひあげます。

とりあえずご機嫌伺い方々に。

前川 晶

謹んでご冥福を祈ります。合掌

次に掲載するのは一九九七年度に開講した学部演習「詩」の意味、「文」の意味で、前川君が提出した小文です。注釈の読み方について

前川 晶

書籍、わけても古いそれには、文章の中途に、四分の一のスケールの文字が、二列にわたって、長短取り混ぜつつ挿入されていることが多い。昔の注釈は例外なくこのようにして本文に付せられている。長い注釈の場合、下まで目をやった後、次の行をすつ飛ばさないように気をつけよう。これをやると結構深刻である。

さて、注釈はだいたい次のパターンから構成される。

- 1、字・語の注釈。ほぼ「A(者)、B也」として表記される。
- 2、句全体に対する注釈。「言・・・」といった具合に、句の直接的な意味を説明するものが中心だが、それを敷衍して、直接には関係なく、論説を展開していくものもよくある。
- 3、他人の意見の引用。「A曰(云々)・・・」で示される。これがけっこう問題。なぜか。後ろに引用者のコメ

ントがついていることがよくあるため、どこで切ればいいのか、意味だけでは判然としないことがあるからである。このような場合、出来る限り原書を参照することをおすすめする。切るべき場所を明確にするだけで、全体の意味がすっと腑に落ちることがある（だろうと思うんだけどな）。ただし、原書が事実上手に届かない場合（e.g. 京都にある、海外にある、時空の彼方にある etc.）はどうしようもない。明清以降の注釈者のものならず問題は無いが、宋はかなり危うい。残っていない場合のみならず、書籍自体は現存しても、現行のテキストには無い文句である可能性あり。補正・逸文があればそこも見ることに。

4、テキストの校訂。たとえば字の異同について「A、一作B」「二本・・・・」といった具合に表記される。

5、音注。四声の別、反切法により発音表記が主である。ちなみにむろんこれらの概念のない、たとえば漢代の注釈には「七余反」などといった記述はありえない。なお宋代の叶韻説には注意。

このうちの、特に1や5は、本文の自然な切れ目を無視して、無理矢理挿入されることもある。また3に関わる問題は、テキストが評点本であればほぼ解決される。句読点が切つてあれば最上等、句点読点の別のない、今回のテキストでも十分上等である。しかし白文の注釈を読む羽目になったとき、我々はどうすればいいのか。

a、「也」を見たら切れ目と思え。まず大丈夫。

b、固有名詞を出来るだけ探して確定する。

c、一字単位で本文にあるのと同じ文字、あるいはそれまでの注釈にあったのと同じ語句の反復がないかを確かめる。対句構造も見逃さないように。

d、わりと有名な書籍なら、古めの日本語の訳本をひっくり返す。注釈の書き下しを載せていたりする。明治書院刊の訳本も頼りになる。ただし過信は禁物。

e、和刻本を探す。変な本があったりする。ただしd以上に過信は禁物。たまにこつちが書き直したくなるのもある。

f、放り出して逃げる（神経症段階）

g、佐野氏誠子、古宮氏陽明（注）に任せて逃げる（分裂症段階）

（注）佐野誠子さん（二〇〇三年博士課程退学）、古宮陽明君（二〇〇一年修士課程修了）この他前川君の書いたエッセイを、中文研究室のホームページに掲載しています。